C 40
756

嶽林寺由緒　完

東京國大學圖書之印

B 23475

大分縣豊後國日田郡光岡村大字友田

太平興國松陽山岳林永昌禅寺由緒

當寺者後醍醐天皇勅願の霊場にして釋楚俊字は明極の開山なり明極は元の慶元府の人にして元徳元年(元の天暦二年に當る)書幣に應じ來朝す路を當郡に由る時に郡司大藏永貞之を尊尚せり天皇其明徳あるを聞食され宮に召して佛道を尋給ふ師の奏する所大に叡慮に適ふ茲に於て中使藤原實世卿を以佛日焰恵

禅師の號を賜ふ（按公卿補任、元徳元年為別當者藤房也、今以實世為別當者、蓋非也、為實世者據参考太平記乎）眷遇甚厚し楚俊奏して曰参朝の途豊後國日田郡友田村の地形を見るに我國報化縣岳林寺に相似たり願くは此地に伽藍を建立し給はんことを之に由て勅を永負に下し給ひ松陽山太平興國岳林永昌禅寺の創立あり元弘元年三月二十七日聖像及ひ宸翰領地等を賜ふ其宸翰に曰

松陽山岳林永昌禅寺者直指單傳之淨場也禅苑規範可相並南禅第一上刹者必矣

又翌二十八日に下し給ふ所の綸旨に曰

豊後国松陽山岳林永昌禅寺早為勅願靈地可奉祈聖運長久故降宸翰仰當寺之法岐　被致王道之太平者天氣如是

式部大輔

宸翰綸旨今尚存在及天皇金輪の茶器草履等皆存之を藏す明極後ち攝州廣巖寺に住す初め梅中

将正成に屢師に参して禅道を学ぶ建武三年五月二十五日正成死節の時禅師衆徒を率ゐて引導焼香し公の遺骸を無異菴に葬る故に其靈主を本寺に奉祀する所以なり康永二年八月二十二日當寺第四世義秀足利尊氏に修補を加へられんことを乞ふ尊氏の書に曰

鎮西岳林精舎依開發已後降法基之子細令重建畢

源尊氏

此書今尚存在又文明五年四月大友修理大夫より寄附せらるゝ書に曰

松陽山岳林永昌禅寺刹住前規之旨亘理大井之両郷五拾貳箇所令宛行訖

大友修理大夫印

存在天正二年二月十八日大友義統も亦尋で寄附せらるゝ書に曰

松陽山岳林永昌禅寺住先例亘理大井之両郷五拾

二箇所領令寄附畢

義統　華押

此書存在す文禄二年五月大友義統退國於此宮部
法印検地寺領三拾三町上地す（亘理大升の両郷五十二
箇所領の事）後毛利民部大夫來郡の時に當て米穀
の寄附あり且天皇の遺蹟たるを以て堂宇の保存を
管轄内に申付らる續て黒田如水（亂入の時なり）小川
左馬之助石川主殿頭小笠原信濃守小川又左衛門の
數氏皆之に同じ寛文十二年九月二日徳川綱吉公より高
三十石の用地を寄附せらるゝ書に曰

豊後國日田郡友田村之内三拾石事寛文十二年被寄
附之訖岳林寺全收納永不可有相違者也

貞享二年六月十一日

綱吉印

享保三年七月十一日吉宗公の書に曰

豊後國日田郡友田村之内三拾石事依當家先判之
例岳林寺收納永不可有相違者也

吉宗印

以下同文延享四年八月廿十一日家重公印寶暦十二年八月
十一日家治公印天明八年九月十一日家齊公印天保十年
九月十一日家慶公印安政二年九月十一日家定公印萬延元
年九月十一日家茂公印綱吉公より先判の例に依り德
川氏代々朱印八通あり太政維新に際し明治元年
の秋日田郡（郡は縣の誤）知事松方正義伯更に奏聞を
遂け田を賜ふこと舊の如し然るに太政維新に際し小祠
と雖とも兩部を廢せらる仍て明治三年庚午五月當寺

も大典を奉じ天皇の尊像及楠公の神像を本郡莊手
村官林亀山に鎮座す松方縣知事の貽書に曰
豊後國日田郡松陽山開基明極者帰化の僧にして
後醍醐天皇に眷遇せられ又楠中將と相善中將戦
死の骸を収め置しと傳ふ嘗て勅願寺の命を蒙
り寺領を賜ひ後世に傳へたりしを文録の頃没収せ
られ寛文の頃より復德川氏高三拾石の田を寄附
せらる然るに太政維新萬機朝廷に復せしを以て明治

元年戊辰予更に奏聞を遂げ田を賜ふことを舊の如し
是れ宸翰の確證及天皇の尊像楠公の肖像を奉祀
せるが故ならん蓋當時の風習神靈を祭るに概佛法
を以てせり今也太政維新小祠と雖とも両部を廢せ
らる于茲正月詔ありて列聖大忌辰を以奉祭の日
と定られ總て皇國の舊典に復す因て同郡荘手官
林亀山（舊名日の隈）清潔の地なるを以て古風淳樸
素の社殿を新營し尊像及楠公の神像を鎮座

し日隈神社と稱し以て奉祀す抑楠公の誠忠
節義眞に百世の師たり況んや其の肖像を傳
來する此地大幸なるを以て配祀する所也神職
は人撰を以て祝祠を命ず依て賜田の内初穗
米を頒賦し供饌奉祀せしむ是れ他にあらず
聖恩に報じ神明を敬する所以なり而岳林寺
は綸旨の如く永く泰平を祈てすならん時明治
三年庚午記以て貽松陽山云

従五位日田縣知事藤原朝臣正義印

明治七年九月ニ至り社寺禄逓減の公布ニ依り寺領悉く上地となり同十六年ニ逓減満期遂ニ無禄となる爾來保存維持の資力を失ふ于茲同二十四年内務省より保存金として金百圓下賜の恩命ありと云爾

参考 太平記 明極禅師参内

元弘元年春元朝より後明極と云得智の禅師來朝せり天子直ちニ異朝の僧ニ御相看の事は前々更ニ無りしかとも此君禅の宗旨ニ傾かせ給ひて諸方参得の御志おはせしかば御法談の為ニ此禅師を禁中へぞ召れける事の儀式餘りニ微々ならんは吾朝の恥なるべしとて三公九卿も出仕の粧を刷ひ蘭臺金馬も守護の備を嚴しくせり夜半蝋燭を傳て禅師参内せらる主上紫宸殿ニ出御成て玉座ニ席を進め給ふ禅師三拜訖て香を拈して萬歳を祝す時ニ勅問有て曰桟山航海得得來、和尚何以度生、度

生、明極塔銘作掃衆）禪師荅曰、似佛法緊要處、重曰、正當恁麼時如何、荅曰、天上有星皆拱北、人間無水不朝東、御法談畢て禪師拝揖して退出せらる翌日別當實世卿を勅使として禪師號を下さる（禪師西源院天正本作國師、金勝院本云、佛日焰慧と禪師號を下さる云云）時に禪師勅使に向ひ此君亢龍の悔ありと云ふこと二たび帝位を踐せ給ふべき御相とぞ申されける今君武臣のために囚はれて亢龍の悔に遭ひ給ひたれども彼禪師の相し申たりしことなれば二たび九五の帝位を踐せ給はんこと疑なしと思召に依て御法體の御事は暫有まじき由強て仰出されけり（天正本に云明極又官人中原章房は天亡の相ありと云云）

龍門夜話

明極俊禪師居光嚴寺、（光當作廣）往而謁見、即問

曰、生死交謝時何如、極曰、兩頭倶截斷、一劍倚天寒、公曰、畢竟作麼生、極震威一喝、公便禮拜、通身汗流、極曰、儞徹矣、公曰、若不來見和尚、安得超出向上關棙、從今世々不失鉗鎚、極曰、公之問酧、不下舊參、卻見幾個宗匠來、公乃擧舊因緣、極曰、善哉、多年不入作家爐鞴、焉有今日事矣、公入殿三拝、焼香而出、明日野守十五戰、斬級過當、入無異菴、與弟匠季及麾屬、列坐自殺、歲四十七、建武三年五月廿五日也、明極率衆入菴、函遺骼、葬于菴後、